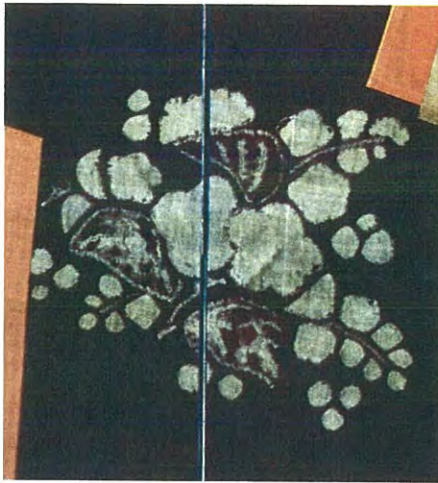


## 歴博 くらしの植物苑だより

第96回くらしの植物苑観察会 3月24日(土)

梅と桃と桜 澤田和人(国立歴史民俗博物館)

### 梅と桃と桜



これは何の花？

(小袖屏風・本館蔵野村コレクションより)

梅も桃も桜もバラ科サクラ属の植物。いずれも春に白や薄紅色などをした小さな花をたくさんつけ、似通った趣をもっています。しかしながら、美術工芸にあらわされた造形を見てみると、3者それぞれで異なるイメージが与えられていたことがわかります。

特に桃は際だつ相違を示します。桃は花のみが取り上げられる例はあまりありません。むしろ実が主役となるのが普通です。紋章がそれを端的に伝えていましょう。梅と桜の場合、紋章は花をデザイン化したものとなっています。それに対し、桃は実がデザイン化されています。桃の花が愛でられなかったわけではないでしょうが、実には強いシンボリック・イメージ—辟邪や長寿—があり、美術工芸などの装飾模様とする場合、その意識が強くはたらいていたとみられます。花が主役になり得なかったため、桃の花はあまり一定したかたちではあらわされていません。ただし、一重咲きの場合、細長い、あるいは、先端の尖った5弁花として描き出されることが多いと言えます。そして、大抵は細長い葉を伴っています。

一方、梅と桜は花が主役となって造形化されています。特に、室町時代から桃山時代の染織品では、梅か桜か判断に迷うほど、両者は良く似た造形であらわされています。梅も桜も花の輪郭は、一重咲きの場合は円に切り込みの入った5弁花のかたちに、八重咲きの場合は円形にまとめてあります。また、つぼみをつけた短い枝を伴うことが多いという点も共通しています。梅も桜も花弁は丸みの強いかたちであらわされますが、一重咲きの桜の場合は、先端に切り込みを入れることがしばしばあります。大きな相違としては、桜には必ずと言っても良いほど葉が添えられるのに対し、梅に葉を添えることはない、という点が挙げられましょう。この相違点に注目すると、今日の眼からすれば梅か桜

のいずれか見分けにくい造形も、どちらの花を意図してあらわしていたのか、比較的容易に判断することができます。

美術工芸の装飾模様としてあらわされてきた植物の造形は、それが植物の実際に即しているか否かということとは、また別の意識に支配されています。一体どの植物をいかなる造形で表現するかには、一定の約束事があります。その約束事は、時代やジャンルによって多かれ少なかれ相違はありますが、少なくとも、ある時点では人々が共有していたものです。そのため、実際とはかけ離れた造形であっても、当時の人々はそれをその植物として認識することができました。造形化された植物は、多分にイメージの産物と言えましょう。そして、互いに似通った趣をもつ梅と桃と桜は、往時のイメージ世界の一端をひもとく格好の材料となり得ます。

---

### 次回くらしの植物苑観察会予告

苑内休憩所集合 申込不要

○第97回「くらしの植物苑と下総の森」 鈴木三男（東北大学）

2007年4月29日（日） 13:30～15:30（予定）

\*4/29は歴博みどりの日 入苑無料

○第98回「ハンカチノキとメタセコイヤー生きている化石ー」 百原新（千葉大学）

2007年5月26日（土） 13:30～15:30（予定） \*要入苑料